

チャペルの思い出

野田 禎（1986 英文科大学院卒）

一時限目の講義が終わると、ショルダーバックを肩にして、チャペルに走って行き、チャペルが終わると、二限のクラスに走って行く。それがいつのころか日常生活になっていました。今と違って、チャペルの時間は一限と二限にあって、チャペルアワーと呼ばれていたように思います。

チャペルのメッセージに沢山の思い出がありますが、その一つを紹介します。

社会福祉学部の教授がその時のメッセンジャーでした。

話しの内容はこのようなものでした。

「君たちには聖書がある。どのようにして聖書を読み、そこから生きる糧を得ているだろうか。どのくらい真剣にみことばをうけとめているか。私がこの夏、学生たちと長島愛生園に行きました。（施設の名前は正確でないかもしれませんが）ハンセン氏病患者さんがおられるところ。今残っておられるのは、まだ特効薬がなかったころにり患された患者さんたち。そこで一人のクリスチャンのハンセン氏病だった方と会いました。毎日、彼は聖書から命の糧を受けていましたが、病気が進んでくると視力が失われました。その時には点字を覚えて聖書を読んでいました。ところがやがて手の感覚も失われて行きました。その時から、舌で聖書の点字をなめて読みはじめたというのです。諸君、神は生きておられる、そして聖書を通して生きた心の糧を下さる。君たちはどのくらい真剣に神のことばを受けておられますか。」

先生のお名前を忘れてしまいましたがか、先生の仰ったことは、私のところに今も刻まれています。